孤独の原因，感情反応，および対処行動に関する研究(I)†

広　沢　俊　宗

社会科学者が人間の経験や感情を研究する場合，一般に2つの観点が存在すると考えられる。少なくとも，アメリカ心理学において最も共通な立場は，行動的，機械(論)的なものである。この観点によると，人間というものは唯物論的な過程あるいはメカニズムであるとみなされ，そこで最も興味深い点が，客観的に観察可能な人間の行動なのである。したがって，ここでは，行動の機械(論)的説明を提示する限りにおいてのみ，内部の力学が重要とみなされるのである。心理学においてこのアプローチは，Skinner (1953) の行動主義によって摘要されているが，その限定された諸形式の中でもなお，そこには，多くの非行動主義者に訴えるものがある。社会学の中で類似している点のひとつは，態度あるいは感情の自己報告を越える客観的，行動的諸変数に対する研究者の選択において見い出される。たとえば，Fischer, & Phillips (1982) によって，客観的な社会的孤立と社会的ネットワークのサイズに関する研究が報告されているが，ここでは，主観的な感情の自己報告というものが二次的にしか考慮されていないのである。

もうひとつの観点は，人間に経験されている現象の研究，すなわち，現象学である。多くの現象学者が，人間の経験は，機械(論)的用語では適切に説明され得ないとしており (Kockelmans, 1967 ; Valle, & King, 1978 ; Wann, 1964)，自己報告について，共感できるように意味づけられた分析こそが，人間の心理と社会生活により深い洞察を与えることができるとしている。

ところで，社会科学者の見地から，現象学的方法における問題点はというと，それが，体系的，経験的に検証可能な種々の心理学的理論をめったに導き出さないということである。これに対して，客観的，機械(論)的アプローチにおける問題点は，人々が自分自身では答えにくいものの実際は最も必要に迫られている質問が，しばしば欠如しているという点である。しかしながら，原則的には，行動的，機械(論)的アプローチによるデータと現象学的アプローチによるデータの2種類のデータが，単一の理論によって説明され得ないという理由は何もないように思われる。Miller, Galanter, & Pribram (1960) は，人間科学としての心理学の両側面を正当に評価しようとする理論家に対して，逆説的に響くかもしれないが，「主観的行動主義者」と呼ぶことを提案し，このアプローチは急速に，アメリカ心理学において最も有力なもののひとつとなりつつある。この傾向の一般性を最も良く表わしているものが，最近の入門書の中に多く見られる心理学の再定義や転換といったものであろう。そして，かつて「行動の科学」として押売りされたものは，今では広く，「行動と経験の科学」あるいは「人間の科学」と呼ばれているわけである。

Rubenstein, & Shaver (1982) によると，孤独感は，上述した主観的行動主義者，すなわち，現象学的行動主義者にとって理想的な主題であるとされている。しかしながら，実際つい最近まで，心理学者によって部分的に否定されてきたのは，排他的な行動主義者（孤独感は，行動ではないので），あるいは排他的な現象学者によって，効果的に研究が進められてこなかったからである。また，現象学者の叙述的描写は，しばしば経験的に検証不能であり，たとえそうでないとしても，めったに行動の分析と関係づけられないからである。孤独の経験は，現象学者によって記述されてきたものの，つい最近まで，量的に評価されたり，あるいは実験的に研究されることがなかったわけである。

現象学的行動主義者の早期の研究においては，個々人の諸経験に基づく報告を注意深く聴くことに重点が置かれている。これらの報告は，インタビューや自由応答形式による質問紙調査によって収集されたり，あるいは，小説や詩を詳細に分析することによって集められたりしている。そして，ここから，より体系的な測度が構成されるわけであるが，そこには，非常に多くの人々から集められた報告が考慮されていなければ

†本研究において，田中國夫教授の御指導を賜わり，また，藤原香果（関西学院大学社会学部昭和59年度卒）の協力を得ました。ここに記して感謝いたします。

ならない。

Peplau, & Perlman (1982) は，孤独感の研究において，孤独の先行条件，孤独の経験の諸特性，および，孤独に対処する方法を区別する必要があると指摘している。そして，Rubenstein, & Shaver (1982) は，これらに対応させて，孤独の理由，孤独に対する感情反応，および，孤独に対する対処行動について，前述した方略を採用し，最終的に新聞の読者3,500名を対象に調査し，因子分析を用いて因子構造を明らかにしている。孤独の理由は，**Table 1** に示されているように，「遊離 (Being unattached)」因子，「疎外 (Alienation)」因子，「ひとりぼっち (Being alone)」因子，「強制孤立 (Forced isolation)」因子，「転位 (Dislocation)」因子の5因子を抽出している。次に，27の形容詞に基づく孤独に対する感情反応は，**Table 2** に示されているように，「絶望 (Desperation)」因子，「抑うつ (Depression)」因子，「耐えがたい退屈 (Impatient boredom)」因子，「自己批判 (Self-deprecation)」因子の4因子を，さらに，24項目から成る孤独に対する対処行動は，**Table 3** に示されているように，「悲しき無抵抗 (Sad passivity)」因子，「積極的独居 (Active solitude)」因子，「消費 (Spending money)」因子，「社会的接触 (Social

Table 1　Factor Analysis of Reasons for Being Lonely

Factor 1 : Being unattached	*Factor 2 : Alienation*	*Factor 3 : Being alone*	*Factor 4 : Forced isolation*	*Factor 5 : Dislocation*
Having no spouse	Feeling different	Coming home to an empty house	Being house-bound	Being far from home
Having no sexual partner	Being mis-understood	Being alone	Being hospital-ized	In new job or school
Breaking up with spouse or lover	Not being needed		Having no trans-portation	Moving too often
	Having no close friends			Traveling often

Rubenstein, & Shaver (1982)

Table 2　Factor Analysis of Feelings When Lonely

Factor 1 : Desperation	*Factor 2 : Depression*	*Factor 3 : Impatient boredom*	*Factor 4 : Self-deprecation*
Desperate	Sad	Impatient	Unattractive
Panicked	Depressed	Bored	Down on self
Helpless	Empty	Desire to be elsewhere	Stupid
Afraid	Isolated	Uneasy	Ashamed
Without hope	Sorry for self	Angry	Insecure
Abandoned	Melancholy	Unable to concentrate	
Vulnerable	Alienated		
	Longing to be with one special person		

Rubenstein, & Shaver (1982)

Table 3　Factor Analysis of Responses to Loneliness

Factor 1 : Sad passivity	*Factor 2 : Active solitude*	*Factor 3 : Spending money*	*Factor 4 : Social contact*
Cry	Study or work	Spend money	Call a friend
Sleep	Write	Go shopping	Visit someone
Sit and think	Listen to music		
Do nothing	Exercise		
Overeat	Walk		
Take tranquilizers	Work on a hobby		
Watch television	Go to a movie		
Drink or get "stoned"	Read		
	Play music		

Rubenstein, & Shaver (1982)

contact)」因子の4因子を抽出している。そして，各因子間，および，孤独感の強度や他の諸変数との関係が詳細に検討されている。

工藤・長田・下村（1984）は，Rubenstein, & Shaver（1982）に準拠し，高齢者（平均年齢：男性69.6歳，女性65.5歳）を対象に，孤独感の強度，孤独に対する対処行動，ならびに感情反応について調査し，男女別に因子分析した結果，対処行動に関しては各々8因子，感情反応に関しては各々7因子を抽出し，男女間の因子の重要性の順位，ならびにその内容に差異のあることを示し，さらに，対処行動と感情反応との間に一貫性が見受けられるとしている。実際に抽出された因子は，寄与率の高い順に，対処行動に関して，男性では，「気晴らし」因子，「創造的活動」因子，「逃避」因子，「観照」因子，「対人的接触」因子，「外出」因子，「受動的娯楽」因子，「感情反応」因子，女性では，「対人的接触」因子，「創造的活動」因子，「忍耐」因子，「手軽な活動」因子，「受動的娯楽」因子，「気晴らし」因子，「諦観」因子，「料理」因子の各々8因子，感情反応に関して，男性では，「寂寥感」因子，「恐怖感」因子，「自暴自棄」因子，「人恋しさ」因子，「自己非難」因子，「疎外感」因子，「孤立感」因子，女性では，「負の感情」因子，「自己憐憫」因子，「生きがい感喪失」因子，「自暴自棄」因子，「虚無」因子，「抑うつ」因子，「自己非難」因子の各々7因子である。しかしながら，ここでは，これらの因子構造を説明するための次元に関する考察

Table 4　孤独感の規定因についての分類

条件	次元	要因	因子	内容
心理的条件	人との関係に関する次元（対他的次元）	人間同士の理解・共感についての感じ方	人間同士は理解・共感することはできないと感じ(思っ)ている	人は信じられない，人のことはわからない，人は頼れない，人に裏切られた，人と意見があわない，人に誤解された，人には自分の気持ちが通じないと思う
			人間同士は理解・共感できると感じ（信じ・思っ）ている	人間同士は理解・共感できると感じているが，実際にはわかってくれないのでわかってほしいと願っている，人のことを理解しようとするがしっくりいかない
		対人関係での疎外	人との異和感	人の中に入れない，人となじめない
			自己の存在の無視	まわりの人に自分を無視された
	自己のあり方の意識に関する次元（対自的次元）	個別性についての意識	人と代替不可能な場面	自分で悩みや問題を解決しなくてはならない，自分で判断・決定しなくてはならない，病気との闘い
			人との内面的接触	自分とはまったく異質な考えや感じ方をもつ人との出会い
		自己の存在に対する自問	自己定義への疑問・意識	自分とは何者かと考える時
			自己の存在理由への疑問	何のために生きているのかと自問する，自己の価値を考える，自己嫌悪
	時間的展望に関する次元（時間的展望の次元）	展望をほとんどもっていない	時間的展望がない	今何をしたらいいかわからない，時間的展望について考えたことがない
		人生単位の展望をもっている	自分の一生を見通している	人生計画をもっている，自分の人生をふりかえり反省する
			老死を自分のこととしてとらえている	自分の老・死を実感をもってとらえている
		超人生的時間的展望をもっている	歴史的や時間的展望の所持	自分の人生の中で位置づける
			宗教的な時間的展望の所持	宗教的な時間的展望に基づいて人生をみている，生成流転の中で人生をとらえている
物理的条件	物理的孤立状態に関する次元	別離の状態	別離の瞬時的状態	駅で人を見送ったあと
			別離の継続的状態	子どもの下宿や結婚で子どもと離れて
		独居の状態	静的独居状態	留守番している時，トイレの中で
			動的独居状態	マラソンしている時

落合良行（1982）

はなされていない。

落合（1982, 1985）は，孤独感の質を研究する方法として，孤独感の規定因についての構造すなわち孤独感の内包的構造を解明していく方法と，孤独感と他の生活感情との関連を究明することによって，孤独感の外延的構造を解明していく方法とが考えられるとしており，まず，前者の方法によって，孤独感の内包的構造に関する仮説を導き出している。ここで，「自分（または人間）が孤独（ひとり）だと感じること」を広義の孤独感とすると，その中には，心理的条件に規定される「孤独感（狭義の孤独感）」と物理的条件によってのみ規定される「物理的孤立感」とが含まれ，孤独感の規定因についての分類は，**Table 4** のように示されるとしている。

また，孤独感は，青年期およびプレ成人期（中学生から20代後半まで）の生活感情であるといえ，老年期には，青年期と同じ位の者が孤独感を感じていることから，さらに，老年期の生活感情であるともいえるが，青年期には心理的（内的）規定因による孤独感が多くみられたのに対し，老年期には物理的（外的）規定因による孤独感も多くみられる点に1つの差異点があるとしている。

次に，狭義の孤独感（心理的規定因による孤独感）についてみると，人生のすべての時期に感じられる孤独感は，人との関係に関する次元（対他的次元），自己のあり方の意識に関する次元（対自的次元），時間的展望に関する次元（時間的展望の次元）の3次元によって解明され，**Fig. 1** に示される3次元構造内に位置づけられるとしている。そして，人生各時期に感じられる孤独感は，この3次元のいくつかによって規定されており，児童期（正確には中学生まで）の孤独感の構造は，対他的次元1次元から成る1次元構造であり，青年期から成人前期までのそれは，対他的次元と対自的次元から成る2次元構造，成人後期および老年期（すなわち45歳以上）の孤独感の構造は，対他的次元，対自的次元，時間的展望の次元から成る3次元構造であるとしている。ここで注目すべきことは，孤独感の規定因を発達的に捕え，その内包的構造の変化をも解明しようとしている点であるが，ここでは，孤独感の規定因，すなわち，孤独の先行条件にのみ焦点が当てられており，Peplau, & Perlman（1982）が指摘した他の2つ，すなわち，孤独の経験の諸特性，および，孤独に対処する方法については，何ら考慮されていない。

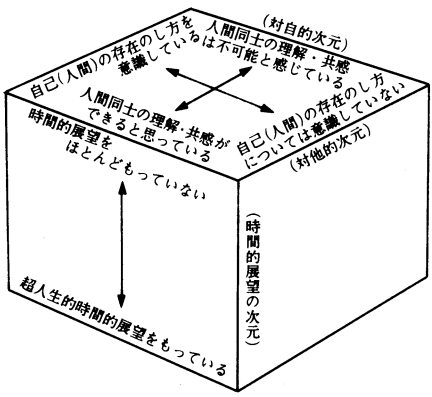

Fig. 1　孤独感の内包的構造に関する試図

落合良行（1982）

本研究では，Peplau, & Perlman (1979), Sermat (1978) を参考にし，「孤独感は，社会的関係における相互作用の達成レベルが願望レベルよりも小さいか不満足なものであるときに生じる，不快で苦悩を与える主観的経験である」と定義する。また，孤独感の測定に関しては，Russell（1982）によると，2つの異なるアプローチ，すなわち，1次元的アプローチと多次元的アプローチがとられてきたわけであるが，第1に，1次元的アプローチ——孤独感は本来，その経験された強度の中で変化する単一の，あるいは1次元的現象であるとみなす——を代表する，Ressell, Peplau, & Cutrona（1980）が開発した改訂版 UCLA 孤独感尺度の邦訳版（工藤・西川，1983）と，多次元的アプローチ——孤独感は，1次元尺度によって捕えることのできない多面的な現象であるとみなす——をとる，Schmidt, & Sermat（1983）が開発した Differential Loneliness Scale (DLS) に準拠して構成された，異なった関係における孤独感尺度（広沢・田中，1984）の両方を用いて孤独感を測定し，2つのアプローチで捕えられた孤独感の質的側面を比較検討する。第2に，Rubenstein, & Shaver (1982) に準拠して，自由応答形式による質問紙調査により項目を収集したのちに，孤独の原因，孤独に対する感情反応，および対処行動について各因子構造を明らかにすると共に，過去の研究結果と比較検討し，さらに，その内包的構造を説明するいくつかの次元を設定する。第3に，孤独の原因，感情反応，および対処行動における性差と孤独感の強度による差，ならびに，各変数間の相互関係を明らかにすることを目的とするものである。（なお，今回は，第2についてのみ報告するものとする。）

方　法

(1)　予備調査

孤独の原因に関しては，「あなたは，どういうときに孤独を感じますか」，「あなたは，孤独に陥る原因として，

どのようなものがあると思いますか」，感情反応に関しては，「あなたは，孤独に陥ったとき，どのような気持ちになりますか」，そして，対処行動に関しては，「あなたは，孤独に陥ったとき，ふつうどのような行動をとりますか」，「あなたは，孤独を解消しようとして，どのような行動をとりますか」という5つの質問を，関西学院大学の学生137名（男子95名，女子42名）を対象に，自由応答形式を用いて集団で実施した。そして，類似した反応をまとめたのちに，より網羅的に項目を抽出するため，Rubenstein, & Shaver (1982)，および，工藤・長田・下村（1984）の質問項目も参考にし，最終的に，孤独の原因18項目，感情反応30項目，対処行動45項目から成る質問紙を作成した。

(2) 質問紙および尺度

1．孤独の原因に関する質問紙

孤独の原因に関する質問紙は，18項目から成っている。反応カテゴリーの形式は，「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「全くそう思わない」の4件法で，孤独に陥る原因であると思うほど高得点になるように，1点から4点に得点化されている。

2．感情反応に関する質問紙

感情反応に関する質問紙は，30項目から成っている。反応カテゴリーの形式は，「非常にあてはまる」「あてはまる」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で，孤独に陥ったときの感情にあてはまるほど高得点になるように，1点から4点に得点化されている。

3．対処行動に関する質問紙

対処行動に関する質問紙は，45項目から成っている。反応カテゴリーの形式は，「しばしば行う」「時々行う」「どちらともいえない」「あまり行わない」「全く行わない」の5件法で，孤独に陥ったときにしばしば行う行動ほど高得点になるように，1点から5点に得点化されている。

(3) 調査対象

対象者は，関西学院大学の学生，男子209，女子193の計402名で，学年別内訳は，1年から4年の順に，男子42，90，49，28，女子46，87，35，25で，平均年齢は，20.5歳であった。

(4) 調査の実施

調査は，1984年11月に質問紙によって集団で実施された。

結　果

(1) 孤独の原因の主成分分析

孤独の原因18項目の平均値および標準偏差を示したのが，**Table 5** である。これより，孤独の原因は全体的に，「人から拒絶されるのではないかという恐れを抱いているため」(2.843)，「自分のことをまわりの人たちに知ってもらおうとしないから」(2.766)，「物事を悲観的に考えすぎているため」(2.761)，「自分が積極的に友達を作ろうとしないから」(2.731)，「自分自身の性格のため」(2.721) といった内的な要因が強いのに対し，「自分のそばに誰もいないから」(1.920)，「家庭環境に問題があるため」(1.993)，「友達を作る機会に恵まれていないため」(2.035)，「進学，就職，引越などで，環境が変化したから」(2.075) といった外的な要因が弱いことがわかる。

Table 5　Item wording and mean scores for causes of being lonely

	Item	M	SD
1	人から拒絶されるのではないかという恐れを抱いているため	2.843	.825
2	まわりにいる人たちが自分を仲間に加えようとしてくれないため	2.388	.804
3	家庭環境に問題があるため	1.993	.903
4	たまたま自分のそばにいるのが知らない人ばかりだから	2.192	.845
5	自分のことをまわりの人たちに知ってもらおうとしないから	2.766	.774
6	物事を悲観的に考えすぎているため	2.761	.822
7	自分には友達ができないと思い込んでいるため	2.438	.946
8	まわりの人たちの考え方と，自分の考えが異なっているため	2.468	.815
9	進学，就職，引越などで，環境が変化したから	2.075	.838
10	自分のそばに誰もいないから	1.920	.826
11	自分が積極的に友達を作ろうとしないから	2.731	.883
12	自分自身の性格のため	2.721	.800
13	人からの愛情や信頼が信じられないため	2.438	.889
14	自分に頼れる人がいないため	2.400	.857
15	身近な人との別離があったから	2.197	.890
16	自分を格好よく見せようとするため	2.408	.855
17	自分を頼りにしてくれる人がいないため	2.231	.782
18	友達を作る機会に恵まれていないため	2.035	.770

次に，各項目間の相関マトリックスから Screetest により最終的に因子数を5と決定し，主成分分析を行い Promax 回転後の因子負荷量[1]を示したのが，**Table 6** である。これらの累積分散寄与率は55.68%で，回転後

Table 6　Item wording and factor loadings for causes of being lonely

	Item	Factors				
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
5	自分のことをまわりの人たちに知ってもらおうとしないから	**.758**	−.002	.041	−.159	.040
11	自分が積極的に友達を作ろうとしないから	**.735**	.043	.107	.079	−.020
7	自分には友達ができないと思い込んでいるため	**.639**	.282	.042	.086	−.159
6	物事を悲観的に考えすぎているため	**.561**	.135	−.104	.026	.058
13	人からの愛情や信頼が信じられないため	.167	**.678**	−.112	−.001	.118
14	自分に頼れる人がいないため	.142	**.644**	.024	−.021	.200
15	身近な人との別離があったから	.028	**.493**	.283	−.111	−.072
17	自分を頼りにしてくれる人がいないため	−.135	**.491**	.030	.353	.131
3	家庭環境に問題があるため	.221	**.404**	−.028	.127	−.238
4	たまたま自分のそばにいるのが知らない人ばかりだから	.104	−.349	**.781**	.040	.050
9	進学，就職，引越などで，環境が変化したから	.031	.159	**.656**	−.068	−.010
10	自分のそばに誰もいないから	−.108	.355	**.555**	−.024	−.107
18	友達を作る機会に恵まれていないため	.005	.197	**.459**	.145	.226
1	人から拒絶されるのではないかという恐れを抱いているため	.210	−.074	−.073	**.724**	−.074
2	まわりにいる人たちが自分を仲間に加えようとしてくれないため	−.182	.209	.080	**.722**	−.080
8	まわりの人たちの考え方と，自分の考えが異なっているため	−.149	.049	.044	.042	**.754**
12	自分自身の性格のため	.115	.126	−.003	−.177	**.648**
16	自分を格好よく見せようとするため	.328	−.155	−.038	.338	.354

の因子負荷量の絶対値が.40以上の項目は，説明分散の大きい順に，第Ⅰ因子で4項目，第Ⅱ因子で5項目，第Ⅲ因子で4項目，第Ⅳ因子で2項目，第Ⅴ因子で2項目である。なお，**Table 7** は，因子間相関を示している。

第Ⅰ因子は，「自分のことをまわりの人たちに知ってもらおうとしないから」(.758)，「自分が積極的に友達を作ろうとしないから」(.735) というような自発的，積極的な対人接触の欠如を表わす項目に高く負荷していることから，「積極的な対人接触の欠如」因子と命名する。同様にして，第Ⅱ因子は，「人からの愛情や信頼が信じられないため」(.678)，「自分に頼れる人がいないため」(.644) というように，対人関係における不信感や孤立を示していることから，「対人的疎外」因子，第Ⅲ因子は，「たまたま自分のそばにいるのが知らない人ばかりだから」(.781)，「進学，就職，引越などで，環境が変化したから」，(.656) などより，「機会の欠如・環境の変化」因子，第Ⅳ因子は，「人から拒絶されるのではないかという恐れを抱いているため」(.724)，「まわりにいる人たちが自分を仲間に加えようとしてくれないため」(.722) より，「対人恐怖」因子，第Ⅴ因子は，「まわりの人たちの考え方と，自分の考えが異なって

Table 7　Inter-factor correlations

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
Ⅰ	——	.205	.025	.191	.091
Ⅱ		——	.249	.260	.063
Ⅲ			——	.081	.134
Ⅳ				——	.119
Ⅴ					——

1）準拠構造行列（reference structure matrix）の因子負荷量を採用した。

Table 8　Item wording and mean scores for feelings when lonely

Item	M	SD	Item	M	SD
1　誰かに会いたい	3.194	.810	16　取り残された	2.649	.870
2　つらい	2.980	.764	17　他人がうらやましい	2.465	.904
3　どこかへ行きたい	2.731	.922	18　くやしい	2.090	.869
4　情けない	2.517	.877	19　誰にも会いたくない	1.878	.909
5　みじめな	2.505	.866	20　イライラする	2.291	.861
6　腹立たしい	2.067	.852	21　不安な	2.828	.807
7　絶望的な	2.174	.907	22　死にたい	1.622	.806
8　やりきれない	2.716	.835	23　意気消沈した	2.759	.814
9　ゆううつな	2.955	.749	24　疎外された	2.614	.852
10　誰かそばにいてほしい	3.194	.822	25　泣きたい	2.415	.942
11　さびしい	3.234	.734	26　恐ろしい	1.786	.743
12　誰かにすがりたい	2.677	.947	27　見捨てられた	2.231	.856
13　逃げてしまいたい	2.085	.869	28　わびしい	2.701	.799
14　何も信じられない	1.948	.820	29　誰かに甘えたい	2.784	.894
15　むなしい	2.831	.842	30　卑下する	2.147	.935

Table 9　Item wording and factor loadings for feelings when lonely

Item	Factors					
	I	II	III	IV	V	VI
9　ゆううつな	**.598**	−.005	.045	.032	−.019	.017
28　わびしい	**.595**	−.044	−.132	.086	.044	.042
15　むなしい	**.584**	−.046	−.071	.173	−.000	−.043
23　意気消沈した	**.582**	.039	−.009	−.174	.077	.144
21　不安な	**.487**	−.050	.155	.004	.154	.043
8　やりきれない	.350	.128	.117	.264	−.127	−.046
22　死にたい	−.069	**.699**	−.042	−.002	−.102	−.050
14　何も信じられない	−.122	**.651**	.018	.041	−.023	.052
13　逃げてしまいたい	−.024	**.526**	.160	−.020	.169	−.030
19　誰にも会いたくない	.075	**.494**	**−.406**	−.000	.079	−.155
25　泣きたい	.182	**.487**	.235	−.046	−.086	−.068
26　恐ろしい	.137	**.472**	−.087	−.085	.193	−.015
7　絶望的な	−.030	**.470**	−.063	.336	−.118	.119
30　卑下する	.051	.393	−.163	−.006	.142	.283
27　見捨てられた	.080	.354	−.003	.118	−.032	.319
10　誰かそばにいてほしい	−.008	−.121	**.796**	−.001	−.041	−.022
1　誰かに会いたい	−.088	−.166	**.771**	.088	.113	−.036
29　誰かに甘えたい	.062	.073	**.710**	−.201	.066	.041
12　誰かにすがりたい	−.030	.195	**.710**	−.037	.007	.002
11　さびしい	.268	−.069	**.483**	.156	−.181	.004
4　情けない	.084	−.030	−.023	**.658**	.223	−.031
5　みじめな	.158	−.011	−.062	**.602**	.085	.097
2　つらい	.189	.062	.271	.322	−.080	.044
20　イライラする	.295	−.038	−.013	.000	**.644**	−.073
18　くやしい	−.137	.079	.069	.082	**.607**	.302
6　腹立たしい	−.093	−.007	−.036	**.487**	**.589**	−.088
3　どこかへ行きたい	.001	.264	.318	.084	.173	**−.542**
16　取り残された	.115	.059	.138	.026	.019	**.528**
24　疎外された	.153	.085	.066	.087	.057	**.447**
17　他人がうらやましい	.031	.048	.124	.034	.256	**.443**

Table 10　Inter-factor correlations

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
Ⅰ	——	.421	.393	.444	.176	.381
Ⅱ		——	.182	.374	.302	.337
Ⅲ			——	.298	.015	.220
Ⅳ				——	.132	.334
Ⅴ					——	.119
Ⅵ						——

いるため」(.754),「自分自身の性格のため」(.648) より,「考え方の相異・性格」因子と,それぞれ命名する。

なお,今後は,性差,および孤独感の強度との関係を,因子別に検討していくことにする。

(2)　感情反応の主成分分析

感情反応30項目の平均値および標準偏差を示したのが,**Table 8** である。この結果より,感情反応としては,「さびしい」(3.234),「誰かに会いたい」(3.194),「誰かそばにいてほしい」(3.194) といった人恋しさの感情が強く,また,「つらい」(2.980),「ゆううつな」(2.955),「むなしい」(2.831),「不安な」(2.828) といった抑うつの感情も比較的強いのに対し,「死にたい」(1.622),「恐ろしい」(1.786),「誰にも会いたくない」(1.878),「何も信じられない」(1.948) といった絶望感や不信感は弱いことがわかる。

次に,各項目間の相関マトリックスから Screetest により最終的に因子数を6と決定し,主成分分析を行い Promax 回転後の因子負荷量[2)]を示したのが,**Table 9** である。これらの累積分散寄与率は59.36%で,回転後の因子負荷量の絶対値が .40以上の項目は,説明分散の大きい順に,第Ⅰ因子で5項目,第Ⅱ因子で7項目,第Ⅲ因子で6項目,第Ⅳ因子で3項目,第Ⅴ因子で3項目,第Ⅵ因子で4項目である。なお,**Table 10** は,因子間相関を示している。

同様の手続きにより,第Ⅰ因子は「抑うつ」因子,第Ⅱ因子は「絶望」因子,第Ⅲ因子は「人恋しさ」因子,第Ⅳ因子は「憐憫」因子,第Ⅴ因子は「苛立ち」因子,第Ⅵ因子は「疎外感」因子と命名された。

なお,今後は,感情反応についても,性差,および孤独感の強度との関係を,因子別に検討していくことにする。

(3)　対処行動の主成分分析

対処行動45項目の平均値および標準偏差を示したのが,**Table 11** である。この結果より,対処行動としては,

2) 準拠構造行列 (reference structure matrix) の因子負荷量を採用した。

Table 11　Item wording and mean scores for coping behaviors to loneliness

	Item	M	SD
1	親しい人に会う	3.779	1.061
2	自分の身のまわりを整理整頓する	2.624	1.215
3	努めて明るくふるまう	2.963	1.180
4	寝る	3.684	1.172
5	食べる	3.231	1.294
6	誰かに気持ちを打ち明ける	3.296	1.312
7	TVゲームをする	1.420	0.865
8	じっと耐える	3.269	1.208
9	仕事や勉学に打ち込む	2.786	1.229
10	人にやつあたりをする	2.341	1.193
11	映画や劇を見に行く	2.724	1.337
12	人の多くいる所に行く	2.425	1.226
13	手紙を書く	2.565	1.441
13	読書をする	3.311	1.321
15	酒を飲む	2.393	1.409
16	料理をする	1.940	1.180
17	ひとりになる	3.114	1.301
18	パチンコをする	1.440	0.938
19	時がたつのをまつ	3.607	1.205
20	車やバイクで走りまわる	1.955	1.350
21	ディスコに行く	1.498	0.900
22	何か (趣味など) に熱中する	3.507	1.262
23	テレビを見る	3.455	1.271
24	開き直る	3.408	1.133
25	誰かに電話する	3.281	1.363
26	親に甘える	2.129	1.269
27	タバコを吸う	1.652	1.261
28	泣く	2.174	1.393
29	旅に出る	2.102	1.238
30	買物に行く	2.741	1.356
31	マージャンをする	1.356	0.874
32	バカ騒ぎをする	2.182	1.371
33	歩きまわる	2.669	1.345
34	空想にふける	3.460	1.283
35	楽器を演奏する	2.396	1.493
36	日記をつける	2.097	1.436
37	スポーツをする	2.881	1.404
38	自分を見つめ直す	3.637	1.097
39	音楽を聴く	4.157	1.025
40	詩や歌を作る	2.022	1.331
41	ペットと遊ぶ	1.729	1.181
42	ラジオを聞く	2.908	1.394
43	楽しいことを考える	3.092	1.277
44	何もしないでいる	3.415	1.223
45	お金の浪費をする	2.228	1.366

Table 12　Item wording and factor loadings for coping behaviors to loneliness

Item		Factors						
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ
27	タバコを吸う	**.695**	.056	−.079	.023	−.196	−.002	−.005
20	車やバイクで走りまわる	**.690**	.023	.070	−.066	.035	−.035	−.066
18	パチンコをする	**.686**	−.094	−.123	−.092	−.019	−.047	.108
31	マージャンをする	**.611**	.125	−.094	.022	.113	−.018	−.008
15	酒を飲む	**.586**	−.032	.197	.172	.094	.007	−.112
21	ディスコに行く	**.469**	.081	.260	−.160	.113	.015	.079
7	ＴＶゲームをする	**.444**	.057	−.220	−.054	.016	−.156	.375
29	旅に出る	**.441**	.050	.128	.050	.321	.265	−.044
22	何か（趣味など）に熱中する	.174	**.686**	.073	−.020	.158	.037	−.038
14	読書をする	−.128	**.619**	−.175	−.009	.118	.192	.032
43	楽しいことを考える	.040	**.541**	.281	−.033	−.052	−.120	.268
39	音楽を聴く	.121	**.468**	.203	.121	.041	.166	−.090
42	ラジオを聞く	.091	**.460**	.103	.100	.117	−.098	.180
9	仕事や勉学に打ち込む	−.113	**.448**	−.185	.143	.339	.074	−.154
3	努めて明るくふるまう	−.071	.356	.301	.053	.168	.028	.128
1	親しい人に会う	.026	.138	**.692**	−.162	.100	−.009	−.040
6	誰かに気持ちを打ち明ける	−.082	−.002	**.672**	.034	.082	.218	.170
25	誰かに電話する	.056	.025	**.650**	−.082	.088	.141	.305
37	スポーツをする	.239	.396	**.458**	−.028	.138	−.111	−.101
32	バカ騒ぎをする	.391	.173	**.421**	.106	.266	−.061	.026
19	時がたつのをまつ	.037	.085	−.038	**.625**	−.109	−.062	.043
8	じっと耐える	−.142	.042	−.154	**.615**	−.050	−.055	−.182
17	ひとりになる	.073	−.054	−.211	**.614**	.061	.245	−.132
44	何もしないでいる	−.019	−.141	−.061	**.571**	−.088	−.017	.203
34	空想にふける	.045	.215	.011	**.485**	.006	.224	.167
38	自分を見つめ直す	−.092	.308	.268	**.443**	−.105	.215	−.171
4	寝る	−.035	.195	.080	**.425**	.177	−.177	.274
24	開き直る	.031	−.037	.241	**.404**	.132	−.264	.181
30	買物に行く	−.077	.227	.248	−.085	**.594**	.159	.260
12	人の多くいる所に行く	.140	.050	.253	−.116	**.552**	−.159	−.064
2	自分の身のまわりを整理整頓する	.049	.062	−.057	−.026	**.517**	.039	.099
11	映画や劇を見に行く	.124	.265	.169	−.230	**.503**	.033	−.083
5	食べる	−.183	.124	.058	.246	**.450**	−.100	.395
16	料理をする	−.050	.127	.086	−.069	**.431**	.348	.238
33	歩きまわる	.282	.045	.097	.311	**.430**	.154	−.130
45	お金を浪費する	.311	.076	.151	.013	.364	.046	.308
36	日記をつける	−.088	.035	.122	.056	.056	**.696**	.197
40	詩や歌を作る	.190	.268	.005	−.014	.098	**625**	.037
13	手紙を書く	−.210	.058	.303	−.076	.214	**.500**	.271
23	テレビを見る	.084	.165	.128	.069	.272	**−.489**	.297
28	泣く	−.082	−.204	.195	.303	−.040	**.448**	.268
35	楽器を演奏する	.102	.310	−.009	.046	.242	.359	−.033
26	親に甘える	−.137	.055	.239	.008	.178	.169	**.563**
10	人にやつあたりをする	.120	−.147	.064	.198	.046	.091	**.538**
41	ペットと遊ぶ	.012	.302	.044	−.027	−.040	.231	**.465**

「親しい人に会う」(3.779) や「何か（趣味など）に熱中する」(3.507) といった孤独を積極的に解消しようとする行動と，「寝る」(3.684)，「自分を見つめ直す」(3.637)，「時がたつのをまつ」(3.607) といった孤独に対して受容的な行動がよくとられるのに対して，「マージャンをする」(1.356)，「TVゲームをする」(1.420)，「パチンコをする」(1.440) のようにギャンブルはほとんど行われないことがわかる。

次に，各項目間の相関マトリックスから Screetest により最終的に因子数を7と決定し，主成分分析を行い Varimax 回転後の因子負荷量を示したのが，**Table 12** である。これらの累積分散寄与率は43.37%で，回転後の因子負荷量の絶対値が .40以上の項目は，説明分散の大きい順に，第Ⅰ因子で8項目，第Ⅱ因子で6項目，第Ⅲ因子で5項目，第Ⅳ因子で8項目，第Ⅴ因子で7項目，第Ⅵ因子で5項目，第Ⅶ因子で3項目である。

同様の手続きにより，第Ⅰ因子は「憂さ晴らし」因子，第Ⅱ因子は「趣味・仕事への没頭」因子，第Ⅲ因子は「対人接触」因子，第Ⅳ因子は「忍耐・待機」因子，第Ⅴ因子は「身近な行動への逃避」因子，第Ⅵ因子は「情緒的逃避」因子，第Ⅶ因子は「甘え」因子と命名された。

なお，今後は，対処行動についても，性差，および孤独感の強度との関係を，因子別に検討していくことにする。

考　察

孤独の原因に関しては，5因子抽出されたわけであるが，まず，Rubenstein, & Shaver (1982) の因子分析の結果と対比させてみると，「遊離 (Being unattached)」因子と「ひとりぼっち (Being alone)」因子は，何らかの対人関係の欠如を理由としていることから，「積極的な対人接触の欠如」因子に対応すると考えられる。同様にして，「疎外 (Alienation)」因子は「対人的疎外」因子に，また，「強制孤立 (Forced isolation)」因子と「転位 (Dislocation)」因子はともに物理的条件であることから，「機会の欠如・環境の変化」因子に相当すると思われる。「対人恐怖」因子と「考え方の相異・性格」因子は，むしろ，その個人の内的で比較的変化しにくい要因であるが，対応する因子が存在しないように思われる。

次に，孤独の原因5因子を落合 (1982) の孤独感の規定因の分類の次元に対応させてみると，心理的条件における時間的展望の次元に属する因子だけが含まれておらず，このことは，青年期から成人前期までの孤独感の構造が，対他的次元と対自的次元から成る2次元構造を成すという落合 (1982) の結果を一部裏付けるものであるといえよう。しかしながら，この5因子を対他的次元と対自的次元の2次元によって説明することは，やや困難であると考えられる。

そこで，孤独感は主観的経験であることから，客観的原因とは別に，むしろ，主観的原因の認知の仕方が関わりをもつと考えられ，このような点から，Weiner (1972) の2次元モデルにあてはめてみることにする。もともとは，Rotter (1966) が統制の所在という概念を提唱し，人格変数の連続体と考えて内的—外的統制を1次元上でとらえたものであるが，達成動機研究の流れから Weiner (1972) は，Heider (1958) の理論を発展させて統制の所在の次元に安定性の次元を加え，課題達成場面の成功，失敗の主要な原因として，能力（内的—安定），努力（内的—不安定），課題の困難さ（外的—安定），運（外的—不安定）の4要因を挙げ，さらに，Weiner (1980) は，援助行動を導く手がかりとしての感情反応に，前述の2次元の他に制御可能性 (Controllable) の次元が関係するとしている。そこで，Weiner (1972) の4要因に対応させて考えると，孤独の原因5因子は，「積極的な対人接触の欠如」因子（内的—不安定），「対人的疎外」因子（外的—安定），「機会の欠如・環境の変化」因子（外的—不安定），「対人恐怖」因子（内的—安定），「考え方の相異・性格」因子（内的—安定）となる。なお，「対人恐怖」因子と「考え方の相異・性格」因子はともに内的—安定要因と考えられるが，制御可能性の次元によって区別されるものと思われる。以上より，孤独の原因の因子構造を説明する次元としては，統制の所在（内的—外的）の次元と安定性の次元（安定—不安定）の2次元を設定することが最も妥当であると考えられる。さらに今後は，時間的展望の次元に属する項目も含め，詳細に検討する必要があろう。

感情反応に関しては，6因子抽出されたわけであるが，Rubenstein, & Shaver (1982) の因子分析の結果と比較すると，「絶望 (Desperation)」因子は，他者との関係が欠如したときの絶望感や不信感，恐ろしさの感情を示すもので，「絶望」因子に対応し，「抑うつ (Depression)」因子は，ゆううつでわびしいといった心理状態を表わし，「抑うつ」因子に相当する。また，「耐えがたい退屈 (Impatient boredom)」因子は，退屈で耐えられずいらいらした感情反応で，「苛立ち」因子に相当し，「自己批判 (Self-deprecation)」因子は，自己に対する魅力のなさや愚かさ，みじめさなどの否定的感情を示し，「憐憫」因子に類似していると考えられる。なお，「人恋しさ」因子と「疎外感」因子は，落合 (1982) のいう物理的条件による一時的な孤独に対する感情と思われるが，前者は，さびしく，特に人を

恋しく思う気持ちであり，後者は，自分だけが取り残され疎外されたと同時に，他者への眺望をも含む気持ちであると考えられる。

そこで，この6因子を適切に分類するために，感情反応の方向性（(1)対自的，(2)対他的）の次元と感情の表現方法（(a)情緒的，(b)評価的，(c)行動的）の2×3の6カテゴリーを設定する。感情反応の方向性というのは，その感情が，他者との関係なしに自己そのものに対して生じたもの（対自的）か，それとも，他者との関係の中で自己あるいは他者に対して生じたもの（対他的）かということによって決定されるものである。また，感情の表現方法というのは，その感情がどのような方法によって表現されているかということから，情緒的，評価的，行動的の3つに分類される。そこで，感情反応6因子をこの6つのカテゴリーに対応させてみると，「抑うつ」因子（対自的—情緒的），「絶望」因子（対自的—行動的），「人恋しさ」因子（対他的—行動的），「憐憫」因子（対自的—評価的），「苛立ち」因子（対他的—情緒的），「疎外感」因子（対他的—評価的）のようになる。部分的には，対応しにくいと思われるものも若干あるが，一応以上より，感情反応を説明する次元として，感情反応の方向性の次元と感情の表現方法を設定することにしておく。

Peplau, & Perlman (1982) は，人々が孤独に対処するためには一般に3つの方法があるとしている。第一は，人々が実際の社会関係を変化させることである。第二は，その個人が社会的接触に対する願望を減少させることである。第三は，人々が経験している社会的不足に対する重要性を減少させようとすることである。このようなそれぞれの方略に基づき本結果を考察することは，きわめて有効であると思われるが，ここではむしろ，対処行動7因子と Rubenstein, & Shaver (1982) の因子分析の結果を対比させることによって，対処行動がより適切に説明される次元を考えてみることにする。

Rubenstein, & Shaver (1982) の「悲しき無抵抗 (Sad passivity)」因子に対応するものは，「忍耐・待機」因子で，どちらも孤独に対して受動的，静的であることがわかる。「積極的独居 (Active solitude)」因子は，「憂さ晴らし」因子，「趣味・仕事への没頭」因子，「情緒的逃避」因子の3因子を含むものと思われるが，いずれも能動的にひとりで何かを行うという点が共通していると考えられる。しかしながら，各因子に高く負荷する項目を詳細に検討してみると，「趣味・仕事への没頭」因子が最もよくこの因子を反映しているといえる。そして，「消費 (Spending money)」因子は「身近な行動への逃避」因子，「社会的接触 (Social contact)」因子は「対人接触」因子に相当すると考えられる。「甘え」因子は，しいて対応させるとするならば，やはり「社会的接触 (Social contact)」因子だと思われるが，質的にやや異なるといえよう。このように，本結果は，Rubenstein, & Shaver (1982) の得た結果と比べ，因子数は異なるが，ほとんど対応しうるものであることがわかる。

そこで，この7因子を適切に分類するために，対処行動の方向性（(1)対自的，(2)対他的，(3)対大衆的）の次元とその様態（動的—静的）を示す要因を組合せてみると，対大衆的次元では動的な様態しか存在せず，「身近な行動への逃避」因子がこれに対応すると考えられる。対他的次元では，動的な様態を示すものとして「対人接触」因子，静的な様態としては「甘え」因子が，さらに，対自的次元では，動的な様態から静的な様態の順に，「憂さ晴らし」因子，「趣味・仕事への没頭」因子，「情緒的逃避」因子，そして，「忍耐・待機」因子が対応すると思われる。従って，対大衆的次元より対他的次元，対他的次元より対自的次元の方が，その様態はより分化し，多岐に渡るものと考えられる。

以上より，孤独の原因，感情反応，および対処行動について，それぞれの因子構造を明らかにすると共に，それらを分類するいくつかの次元を設定してきたわけであるが，少なくともこれらには，方向性の次元が共通に存在することがわかる。さらに，孤独の原因に関しては安定性の次元を，感情反応に関しては感情の表現方法を，対処行動に関してはその様態を示す要因を加味することによって，より適切に分類されるといえる。

今後は，大学生だけにとどまらず，若年層から老年層に至るまで幅広い調査対象により，こられの次元の存在を検証していくつもりである。さらに，孤独の原因，感情反応，および対処行動における性差と孤独感の強度による差，ならびに，各変数間の相互関係を，詳細に検討していくつもりである。

引用文献

Fischer, C. S., & Phillips, S. L. 1982 Who is alone ? Social characteristics of people with small networks. In Paplau, L. A., & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness : A sourcebook of current theory, research, and therapy.* John Wiley & Sons, Inc.

Heider, F. 1958 *The Psychology of interpersonal relations.* John Wiley & Sons, Inc.（大橋正夫訳　1978 対人関係の心理学　誠信書房）

広沢俊宗・田中國夫　1984　異なった関係における孤独感尺度の構成　関西学院大学社会学部紀要，49，179—188.

Kockelmans, J. J. (Ed.) 1967 *Phenomenology.* Garden City, N. Y. : Doubleday.

工藤　力・長田久雄・下村陽一　1984　高齢者の孤独に関する因子分析的研究　老年社会科学，6（2），167—185.

工藤　力・西川正之　1983　孤独感に関する研究（1）——孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討——実験社会心理学研究，22，99—108.

Miller, G. A., Galanter, E. H., & Pribram, K. 1960 *Plans and structure of behavior.* New York : Holt.

落合良行　1982　孤独感の内包的構造に関する仮説　教育心理学研究，30，233—238.

落合良行　1985　青年期における孤独感を中心にした生活感情の関連構造　教育心理学研究，33，70—75.

Peplau, L. A., & Perlman, D. 1979 Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In M. Cook, & G. Wilson (Eds.), *Love and attraction.* Oxford. England : Pergamon.

Peplau, L. A., & Perlman, D. 1982 Perspectives on loneliness. In Peplau, L. A., & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness : A sourcebook of current theory, research, and therapy.* John Wiley & Sons, Inc.

Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Phychological Monographs*, 80 (Whole No. 609), 1—28.

Rubenstein, C. M., & Shaver, P. 1982 The experience of loneliness. In Peplau, L. A., & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness : A sourcebook of current theory, research, and therapy.* John Wiley & Sons, Inc.

Russell, D. 1982 The measurement of loneliness. In Peplau, L. A., & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness : A sourcebook of current theory, research, and therapy.* John Wiley & Sons, Inc.

Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. 1980 The revised UCLA loneliness scale : Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472—480.

Russell, D., Peplau, L. A., & Ferguson, M. 1978 Developing a measure of loneliness. *Journal of Personality Assessment*, 42, 290—293.

Schmidt, N., & Sermat, V. 1983 Measuring loneliness in different Relationships. *Journal of Personality and Social Phychology*, 44, 1038—1047.

Sermat, V. 1978 Sources of loneliness. *Essence*, 2, 271—276.

Skinner, B. F. 1953 *Science and human behavior.* New York : Macmillan.

Valle, R. S., & King, M. (Eds.) 1978 Existential-phenomenological alternatives for psychology. New York : Oxford University Press.

Wann, T. W. (Ed.) 1964 Behaviorism and phenomenology : Contrasting bases for modern psychology. Chicago : University of Chicago Press.（村山正治編訳　1980　行動主義と現象学—現代心理学の対立する基盤—　岩崎学術出版社）

Weiner, B. 1972 Theories of motivation : From mechanism to cognition. Rand Mcnally.

Weiner, B. 1980 The Role of Affect in Rational (Attributional) Approaches to Human Motivation. *Educational Researcher*, July—August, 4—11.